仏教文化の盛衰

0)

第 節 仏教伝来と渡来人

仏教文化の開花

して表現されている

る。 本歴史の中で人の誕生と共に存在し、 がどういう形で展開してきたか、 仏 神 体化しながら日本宗教を形成してきた。 は人間の死を根底に、 ح 仏 仏教につい て述べておこう。 て記述する前に、「神と仏」につ あの世をつかさどっていると言え 本来、 時には対立し、 日本文化の中で神と仏 現世をつかさどり、 従来、「神」は日 また融 合し渾

毘盧遮那仏(大日如来)という中心的ではいる。して目に見える形で表現されている。 両方に参り一年の祈願を行っている。 とができる。 素が強いこと等を、 縄文時代の信仰では呪術的要素が濃く、 仏 は実際は目に見えないけれども、 (大日如来) という中心的な仏の救済が、 現在では正月が最も良い例で、 発見されている遺跡・ ただ思想的に言えること 例えば、 遺物から読み取るこ 弥生時代は祭祀的要 釈迦思想を実在は 人々は 世界空間 神社・ 五仏五菩 0 お寺 中

> 習合の造形が生まれ、 まり仏と神が融合体として存在するようになる。そして、 ののくものとして崇められ、 薩であり、 されることで、 在するのである。 思想である。 更には五大明王として展開する。 仏がやがて祖霊になり、 それに対し「神」 矛盾しているの 民俗的には念仏踊りや神楽等に習合体と 現世万物に神が宿り、 いは神も は最初から怖 神霊になっていく。 一神像」として造形化 W ゎ いもの ゆる 人の心に潜 恐れお 権がんげん 神仏

える。 服装をし、 る。 形化したものが も神が形に変えるのは仏教 神 (をし、仏像形式の結跏趺坐の形をしている。このこ神像彫刻で最も古いのは京都松尾大社の男神像で、 マの 形 のが「御神体」若しくは、「御れは本来は無形であったもので、 若しくは、「御正体」として形にな (仏像) の影響が強かったことが それを民俗学 このことから 官人の かに造 伺

まひ神道を尊びたまふ」とあるのは真にそのことと言える。 れ、 と表現するのは、 あったといわれている。 合体となっていくが、 こうして神と仏の出合い 互いに習合できるところ、 仏教導入時から神と仏がそれぞれに信仰さ 『日本書紀』 書紀の用明天皇前記に「仏法を信じた は、 できないところの受け 神祇の世界に仏教が伝播して習 が仏を「蕃神」とか 止 仏神. 立め方が

小 乗 仏 教大乗仏教と 紀元前五〇〇年ごろ釈 が開創された。 釈迦はインドのヒマラヤ南麓 迦牟尼によって 「仏教

で釈迦像を造り始めたという。 後五○○年を経た、紀元一世紀末にガンダーラ、 見守られ八十歳で亡くなった。 得たという。 1, 加か ぶため、仏足石・台座・菩提樹・宝輪等の代替物にたより、 毘羅 迦三十五歳の時仏陀加耶の菩提樹の下に座って正 覚を 城 主 の そして、 浄飯王の子として生まれた。 インドのクシナーラで多くの弟子たちに 釈迦の死後弟子たちは、 母の名を摩耶 マトゥーラ等 彼を偲 と言 死

北方域に広まり、 境地にまで導くことを理想とするの 修行と思想とに専念する出家教団を「小 乗 仏教」と言い、南 方を中心に広まった。反対にすべての衆生を救済して、仏陀の その後、 釈迦仏教は大きな広がりをもち、 日本へ伝授された。 を 大乗仏教」と言 俗世間を超越して

隋国 頃の哀帝 格とは異なり、 た仏教内容が定着したのは、 従い変化し、また国々の王朝によって変貌した。 わった。中国へ入った仏教は、民族や国家を超越した普遍的: に伝えたのが最も有力とされている。本来の仏教は伝播 証するような宗教として広まった。 大乗仏教は、 天台・華厳・三論・ ・唐帝国時代に最も隆盛を極め、 元寿元年 中央アジアを経て紀元前後には中国に伝来し、 呪術的で権力を維持するための、 (紀元前二)に、大月氏国の使者伊存だとして広まった。中国への伝来時期は、 禅 • 浄土・三階級など、 隋・唐王朝との交渉が盛んなとき 朝鮮半島を経て日 現在の日本の 日本へ伝播し 特権階級を保 背るに 本へ伝 が ? 景ゖ前 盧ヵ漢 性

> 宗教の基礎となるのは、 この時期中国仏教で成立したものであ

る。

である。こうした内容の関係は、 の癒着が進み、 つまり、 王朝に各諸号を受ける冊封関係があったからと言われ けての三 言っても過言ではない。 ^と伝えられている。 仏 教が中国から朝鮮へ伝播したのは、 仏教を介在として大規模な寺院造営や有力支配者層と 国時代である。各国に伝授されていく背景には、 仏教と国家の因果関係が持たれるようになるの ちなみに、 日本へそのまま伝授されたと 三国への伝授は以下のとお 四世紀から六世 7 紀にか V . る。 中国

- 高句麗…小獣林王三年 (三七二) 前秦国 か Ġ
- 新 羅…法興王十五年 五二八 梁国
- 百 済…枕流王元年 (三八四) 東晋国から Iから

高 句麗の僧一然によって編纂され 一心に仏を奉じ、広く仏寺を興し、人を度して僧尼とな た歴史書 三国 [遺事]

す、 また天性風味、 多く神仙を尚ぶ

これ ていたとみえる。 詠ったものであり、 11 る。 は新羅国真興王が五四〇年に即位し、 先に記した神仏習合の思想が既に新羅国において成立し 仏寺と神仙を共に受け入れた内容を示して その仏教信仰ぶりを

仏教公伝と私伝 さて、 教が公に伝授されたのはいつであろうか。 第一 章にお r V て記したが、 H 本に仏

あらためて記すこととしよう。

欽明戊午年 (五三八) 『元興寺伽藍縁起資材帳

"上宮聖徳法王定説

欽明壬申年 (五五二) 『日本書紀』

欽明十五年 (五五四) 『日本書紀

ら九人に交代したことが記されており、 的に位置付けるなど若干の問題を残している。 とか教典が奉納されたと記してはいるが、 が戊午説を受け入れるとは考えにくい。二の仏教公伝も、 な文化技能者を送っていることが分かる。 ておらず、資料の信用度からすれば、意図的に文化受容を否定 ついては定かでなく、ここにも多くの問題を残している。 この問題の解決策を見いだした松木裕美は から三の説をそれぞれ解釈すると、まず一 「戊午革運説」にもとづいて設定された可能性が強く、 同時に大和政権へ多彩 しかし、その時期に 僧侶については触れ の戊午年は、 (朝日百科 三は僧侶七人か 仏像 日本 僧侶 中 国

の歴史四六)次のように述べている。

究し、仏教を伝達した百済聖王の即位年次は 「原因を捜し出したのは笠井倭人と三品彰英で、 百済王歴を研

①五二三年 (『三国史記』による)

②五二四年 (『日本書紀』による)

Ĭ. 一三年 (『三国遺事』 百済王暦の即位干支史料による

④五二七年 (『三国遺事』 百済王暦の治世年数による)の 四 伝

> 年は五二三年にあたり、 墓誌石に、癸卯年五月七日に崩じたことが記されていた。 次に記しているものを整理した結果、 説がある。 十六年で合致する。 る。つまり一一③、 公州宋山里古墳群の武寧王と同王妃の稜が発掘され、武寧王 我が国の継体から欽明朝に起こった同一事件を異年 したがって聖王即位年が問題となり、 二―④を基準とすると、 同時に百済聖王即位年になる。」 編年上の問題と解釈でき 両者は百済聖王二 韓国 0

宮聖徳法王帝説』 しておきたい。 想定されている。ここでは、 (五四八) であることから、 聖王二十六年は五四八年に相当し、 などにあるように仏教公伝事実を五三八年と 「仏教公伝」はこの年であろうと 前述の解釈を尊重しつつも、『上 日本では欽明天皇戊申年

向きとみられているが、 伝していたことが十分考えられる。 後述したいと思うが、仏教は畿内地方に優先的に公伝された 北部九州には公伝に先立って仏教が流

られている例をいくつか挙げてみよう。 私的な仏教というと、 なかなか時期的にも判断がつきにくいものである。 公文書等に記されていないもの が多

仏獣鏡の発見例

顕宋天皇三年(五世紀末か)に近江の三津首百枝 草屋において田の泥土で長さ三尺の比丘 僧 0) が志賀 形を作

た。

- 後魏孝荘 帝の皇子・善正が豊前英彦山に来て霊山 寺 を開
- 継体天皇十六年 堂を結び、 本尊を安置して礼拝した。 <u>五</u>二二 司馬達等などが大和坂しょだっと 『扶桑略記 田田 原に草

福岡県大野城 消費遺跡から六世紀後半ごろの疑似瓦が出 市、 春日市、 太宰府市等の 瓦陶兼業窯跡 及び

る。 孫が聖徳太子に仕えた鞍 作 止利仏師であることは有名であ などが見られる。 これ以外にもいくつかあったであろう。 司馬達等が草堂をつくって仏像を安置したよ 司馬達等の

ち早く渡来人による私的の仏像を祀り、 根全体を覆う量は検出されてないことなどから、 恵器工人の手によって造作されたものであり、 建物等に使用された可能性を秘めており、 の用途が考えられる。このことからも、 る とした仏教が形作られ、 仏教文化を積極的に導入した氏族によって、 が漂い始めていたことが想定される。 「国家仏教」 「草堂」とはどの程度の建物か興味のあるところであ 豊前: 地方を中心として発見されている初期瓦 への道程をたどるのであ 後に官寺を中心に多くの寺が建立 仏教を受容しようとす 九州北部地方にも 初期瓦は草堂とする 渡来集団を担い手 出土量等から屋 大棟・隆棟等 私 的氏寺を は、 須

伽 藍 仏 教

H 百済から僧侶・仏舎利・寺工・露盤博士・瓦博士・ は崇峻天皇元年 五 八八八

画

言えよう。

は、

工を贈り、 飛鳥の真神原に法興寺 蘇我馬子、 百済僧から授戒し、 (飛鳥寺) を建てる。 学問尼善信等を百済に派

る。

るが、 前に、 建立以前 た仏舎利を納めたという。ここでは五重塔でなく相輪橕のよう。**゚ーレギッ 明らかな記述として、敏達天皇十四年 的なものか、 記述からすると、 しまった。そして、「復火を伽藍に縦く」と記され、 め、 身と言われている向原寺が建てられたが、 目が百済伝来の仏像を安置した小墾田の家は、 記事である。 なものと推定されている。 立以前に「廃仏」 と記されており、 大野丘に塔を建てて大会を催したとあり、 しかも伽藍配置を有していたことになる。 神の怒りに触れたとして、仏像は難波の堀江 北部九 塔の存否が重要な鍵を握るものと思われる。 私的豪族の仏像崇拝という行為に、 に伽藍寺院に到達過程の建築物が存在してい 州 更に 初期出土瓦と照らし合わせても、 あるいは一堂伽藍的なものか興味あるところであ 公式仏教伝来に伴い寺院建立が整備され 文献にみえる日本で初めての本格的寺院建立 の行為、 『日本書紀』 いずれにしても、 「伽藍」 は、これより少し前に、 の文字が読みとれ (五八五) 蘇我馬子が、 更に司馬達等が 仏像を安置する建 疫病が流 五五八年 その伽藍が草堂 興味ある事実と 後の豊浦 に投げられ 塔の存む る。 行 飛鳥寺 0 たこと 飛鳥寺 したた 寺 蘇 この 就能 る以 我稲 建 7

物、

聖徳太子の崇仏によって、 四天王寺・法隆寺等が造立され

備)、 ている。単純に僧尼数と寺院数とを計算すると、一寺院に三〇 僧尼数等が調査されている。それによると僧数八一六人、尼数 出てきた。 いく中で、 五六九人、寺院四六か所が建立されていたことが明らかになっ 人ほどの僧侶たちが働いていたことになる。この四六か所の寺 三七年目の推古天皇三十二年 (六二四) には、全国の寺院の数 (京都市右京区蜂岡町)、 等が主なものであるが、 阿倍氏の阿倍寺(奈良県磯城郡阿倍)、太秦氏の広隆 地方豪族も聖徳太子にならって寺を造るもの 吉備氏の吉備寺(奈良県磯 飛鳥寺の造営が始められ が多く てから 城 郡

が、 る。 氏の各寺院や、 六世紀代に渡来した渡来者集団が、 院造立が盛んに行われたことが推測できる。これらの背景には かった。半世紀以上の年月の間に十数倍の寺院数になってお 諸国の寺院数を調査したところ、 院は主として近畿地方を中心に調査した数と思われる。ところ を媒介として、 く、寺院の造立や造瓦・建築など高度な技術面を前提に、 天智・天武・持統と続く天皇時代に、 これより七○年を経った持統天皇六年 豊前地方に存在する古代寺院跡等から想定され その普及に関与していたことが河内国の 五四五か寺であったことが分 仏教徒であった可能性は高 仏教興隆に伴った寺 (六九二) に、)西文漢 再度

いたと言われ、釈迦の仏舎利を塔に祀ることが中心になってい釈迦入滅後の寺院は、塔と金堂が存在することで成り立って

見て喜び躍る」とあるように、金銅仏に対する尊敬の念が優先、大馬子が、仏像を祀るために家を祓い浄めて寺としたことや、我馬子が、仏像を祀るために家を祓い浄めて寺としたことや、原に四天王寺などは金堂が塔よりも先に造立されていたる。日本では発掘調査などで明らかになっている若草伽藍や飛る。日本では発掘調査などで明らかになっている若草伽藍や飛

した可能性が考えられている。

講堂を結ぶ回廊が巡る伽藍配置である。 なっており、塔を中心に東・西・北方向に金堂を配し、中門と清岩里廃寺や定陵寺と同じ伽藍を有していることが明らかにととなる。飛鳥寺は、昭和三十二年の発掘調査によって高句麗がそれであり、一塔三金堂の飛鳥寺(法興寺)が建立されるこがそれであり、一塔三金堂の飛鳥寺(法興寺)が建立されるこ

豊前における渡来人の活動

らされた。
も及ぶ仏教文化等、日本の文化論を形成するに至る原点がもた作の普及・青銅器や鉄の文化・墳墓、そして人間の思想にまで作の普及・青銅器や鉄の文化・墳墓、そして人間の思想にまで、稲

て、先進技術と多くの文化が持ち込まれた。大和朝廷の支配層特に古墳時代は朝鮮半島から移住してきた渡来人たちによっ